

長尾宇迦

善知鳥

鼓



善知鳥の鼓うと
長尾宇迦う



講 談 社

善知鳥の鼓

1100E

第1刷発行 昭和55年3月15日

著者 長尾宇迦

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 1980 UKA NAGAO Printed in Japan

長尾宇迦(ながお・うか)

一九二六年生。山口県出身。国

学院大卒。

第二回小説現代新人賞受賞。著

書に「山風記」「鬼の棲む里」

など。

現住所 岩手県紫波郡都南村津

志田二一七八一

善知鳥の鼓

装帧

村上

豊

將軍家御馬買役人が、例年どおり馬產地である奥州南部領に下向してきた。これは慶長年中にはじまり、二歳駒検分は、秋から初冬にかけておこなわれている。

その一行が、御用馬の調達を滞りなくすませて、盛岡城主南部山城守重直の招きをうけ、二ノ丸大書院での別宴にすごした宵は、おりから寛永十二（一六三五）年十三夜の明月であった。

貴船玄衛は、御次ノ間に、ただひとりで鼓を打っていた。気合いをこめているのだが、妙にうわずった音しかとり出せないのは、革が底冷えのする乾きのつよい夜気になじめぬからだ、と腹立たしくなっている。

宴席からは、はきはきはすんできこえる客人たちの声と、たどたどしく淀んだような南部説の応対がもれていた。

山城守重直は、南部に独得の肚はらの分からぬ茫漠ぼうばくとした風貌で、寡黙ながら、ときおり、低いがよく通る声をかける。

重直は、四年前に襲封したばかりだったが、三十歳になっても、側近が首をかしげるほど、度しがたい振舞いがたえなかった。

御馬買衆のために別宴を催す、と気紛れのようにいい出したのも重直で、前例のないことであった。

たとえば、將軍家の差遣役人であろうと齒牙にもかけぬ、といった態度をみせる重直が、この秋

に渡ってきた菱喰鳥の吸い物をすすめるという破格の接待ぶりを、自らかつて出たところに、家か中も重直の思案をはかりかねているようである。

玄衛は、さいせんから思うにまかせぬ鼓の音に氣をやんでいるが、ふと獸の咆哮のようなものをきいていた。氣にしはじめると、それは重重しく耳みみ朶だを匍はつて、脅迫してきた。玄衛は背筋に怯おそえを感じて、いつか鼓を打つ手をつよめている。

大書院から、重直の声がかかり、宴席によびいれられて、玄衛は、ようやく人心地がついた思おもいになった。

「ほう、まだ前髪がとれぬではないか……」

御馬買衆の一人が、驚いたふうに、玄衛をみていった。十四歳の玄衛は、元服をしていない。顔にあどけなさが残るが、色は浅黒く、薄い眉の下の切れながの眼が、利発にかがやいている。

「との、かかる明月のもと、お鼓のなにげなしきこゆるあたり、ご風流感服仕りました」

御馬買衆の頭人かみどが、重直に、まんざら世辞でもないように、鉢はちのひらいた白髪頭はくはつがしらをうやうやしくさげてみせた。

重直は、左頬の大きい疣いぼを小指で搔かきながら、わずかに頷うなづいた。

「そこもとも、とのご風流にあずかつて、めでたいことじゃ、ご家来冥利であろう。一段と精進せらるるがよい」

鼓を膝にかしこまっている玄衛に、頭人は好人物らしくいたわりをこめた声をかけた。

「わたくしは、南部さまのご家来ではありません」

玄衛は、きりかえすような口調でいった。一瞬、座が静まった。このような場所ですることばではなかった、と玄衛はつまずきをおぼえたが、やはり、改めておかなければならぬという氣持

が先にたった。

「栗山吉次郎の家来にござります」

御馬買衆たちに、不審な表情がはしり、接待側に狼狽がみえたが、正面の重直は無表情のまま眉ひとつうごかさな。

上席に侍した家老の石井伊賀に、説明してやれ、というように軽く顎をしゃくった。

「さて、当家には、公儀よりのお預人、筑前黒田家の元家老、栗山大膳どのがござりましてな。吉次郎とは、その子息にござります」

御馬買衆たちは、すばやく合点して、伊賀に多くを語らせないふうに、呑みこんだようすをした。

「いかにも、予が南部の国は、よほど住みよいとみえての。黒田騒動の張本人につづいては、この夏に、対州の無方規伯までが、預けられてまいった次第ぞ」

重直の声には、得意のひびきがある。

無方は、禪僧であるが、対馬藩の朝鮮外交に関与し、国交文書の改竄にくみして、その罪が露われ、配流されたのであった。

「この貴船玄衛なる者、年端もいかず小鼓の上手にて、うえさまの所望にかぎり、登城をばさし許してござります」

石井伊賀は、御馬買衆の前をつくろうように、固い声でいった。公儀預人に対して、南部家は決して寛容にしているのではない、という氣づかいである。

「こやつめ、筑前者だけあつての。なかなかの頑固者よ。予の家来になれと申しても、かぶりは振らぬ。憎い奴じゃ。鼓もよくするが、小柄も使うそう。こやつほどの達者、わが領内にはお

らぬ。とかく、能ある者は領の外じゃ」

日ごろは、口数が少いとされる重直が、かさねて、つよい声でいった。重直が家中を、田舎者の無風流とあざけり、無骨者とさげすむのは、普段のことだが、御馬買衆からすれば、石井伊賀をはじめ、接待している南部家の家士が面罵されているようで、気の毒な格好になった。

玄衛は、顔があげられなかった。いきなり自分の芸によって傷ついた気持である。泣き面になった。

この日の夕刻、玄衛は城からの使いをうけて、登ってきた。

これまで、南部重直に召されて、なんとか鼓を打ったことはある。「あっぱれ」と褒められ、褒美として金品をさずけられる。玄衛は、若年であり、その鼓を褒められればうれしいといった無邪気から、ためらうこともなかった。今宵も、重直の趣向にしたがつて、御次ノ間で、鼓を打っていただけである。

なぜ、南部家の家来でもない自分がここに引き出されて、理不尽な目にあわなければならぬのか、とうらめしいのだ。が、玄衛には周囲から敵意のようなものは伝わってこない。

いったいに、南部家中はどこか物たりないほど腹中を判然とさせないところがある。彼らなりに意向はあるのだろうが、他国者には掴みかねる無愛想に通ずる表情であった。

玄衛は、むしろ敵意をあからさまに感じたなら、だれが再び鼓を打ちにきてやるものかと、気が楽になったかもしれない。

宴は沈むでもなく、浮くでもなかった。

重直は寡黙であるが、家中も決して饒舌ではない。南部武士は、戦場にあっても鯨波をあげず敵陣に攻めいり、声もなく敵首をあげ、あるいは敵勢によって一軍が敗亡するおりも、ついに喊

声は起こらなかったという、いわくつきのお国柄である。

月光は、いよいよたけなわになったが、席は納められるけはいが近づいていた。

「あ、きこえるー！あの声がー！」

玄衛が、とつぜん叫んだ。鼓を打っていた時に、恐怖をおぼえた獣の咆哮を、いまははっきり耳にしたのだ。

玄衛の異様な声に、御馬買役人たちは、一斉に身構える姿勢になった。戦国の殺伐な気風が、まだ去らない時代である。公儀より下向する役人は、一方で隠密をつとめるものとうけとられていたから、いつ、どのような危険に身をさらすことになるかもしれないなかった。

「いや、大事はござらぬ。これとて、うえさまのご趣向にござりまするわ」

石井伊賀は、客人をなだめるようにして、重直の指図をうかがうふうに顔を傾けた。

「まず、月を存分にいれるがよい……」

重直は、下座に命じて、廊下の大障子を引きあげさせた。

皎皎と白昼のように冴えわたる月光の下に、広大な庭がひろがっていた。

その庭に向って、伊賀が手にした扇をひらいて招くと、築山のかげから人数がうごきはじめた。

獣の咆哮は、彼らによって運ばれる大仕掛な檻の中から発していた。

なにごとが始まるかと、大書院は息をひそめて、小者たちが舞台をしつらえるようすに、目をそそいでいる。

「おお、あれは虎ではないか……」

「ちがいない。さても見事な虎斑じゃ」

御馬買衆は、驚きの声をかわしながら、身を乗り出すようにした。

「いかにも、当家が將軍家より御預りの虎にござりましてな」

伊賀が、おごそかな声で披露する。

盛岡城内鍛冶屋御門ぎわに、御虎屋敷とよばれる囲い場があった。これは將軍家が東埔寨王より贈られた雌雄二疋で、たまたま献上の日に江戸城に登城した先代の南部利直が、傍杖をくらったかたちで、そのまま預かることになったものである。二疋は、盛岡到着のころは評判だったが、城内の囲みの奥におかれると、いつか世間には縁遠い存在になっていた。

重直は、父の利直から二疋を引きついだのだが、飼育の苦勞も耳にしていた。重直がごくまれに、散歩の道すがら檻に近づくと、二疋は牙をむき唸り声をあげて襲いかかる勢いをみせるのだ。「おのれ、畜生のふんさいで」と、重直は鞭をくれるが、二疋の猛虎が怒気を全身にみなぎらせて、檻に身をうちつけてくれば、「おのれ」といいながら、二三歩あとずさりしている。

「うえさまに、諫止諫言できるのは、御虎屋敷の二疋だけだ」とは、ちかごろ側近が陰口のことだった。

玄衛は、御馬買衆の肩ごしに、虎という異国の猛獸をはじめて眼にして、気がつくと拳をかため、齒をならしていた。

御馬買衆の頭人が、長嘆息を周囲にきかせるようにして、重直に一礼した。

「との、今宵のご首尾、明月に配するに生ける猛虎とは、まことにいたみりましてござります」

重直は、大きく顔を左右にした。

「將軍家も、いかい迷惑を預けられるぞ。のう、預ったからには、殺すもままならぬ。しぜん往

生するまでは、手出しがかなわぬとは、よい面の皮じゃわ」

重直は、吐き棄てるようにいった。頭人はきかぬふりで、虎に眼をかえした。

玄衛は、預ったからには殺すもできぬ、といった重直の声に、なにかひつかかるものをおぼえている。

南部家が、幕府より預った厄介は、二疋の虎ばかりでなく、流人のこともいつているのではないか。が、かつて猛虎であったとしても、いまは牙を抜かれた弱い立場にすぎないのだ。栗山大膳が、そのとおりである。

玄衛は、大膳の人類である自分に、重直が怖い顔を向けているのではないかと、うわ目づかいにうかがうと、相手が頬の疣を搔きながら、あたりを物色している鋭い眼にからまってしまった。

「筑州……。鼓を打てい。そうじゃ、早打ちにいたせ」

重直は、なにか企んでいるように、疣を搔きつづけている。虎が咆えたてた。玄衛は、いわれるままに、鼓を持つと席をはなれて下座に移った。

「伊賀、予の命じたがごとく、虎の餌は調ととえてあろうの……」

重直は、庭をみまわして、念をいれるようにいった。

「は、御意のままに、ひかえさせてござりまするが……。さればとて……」

「月のかげらぬうちぞ。いそげ」

重直は口調をつよめたが、石井伊賀は困惑した表情で、平伏した。

「伊賀、予のはからったごとくにせよ。いかに江戸は珍奇なる物見があるとは申せ、虎に生き餌をあたうるに見参するは難事じゃ。よきみやげ話になろうぞ」

重直は、頭をあげない伊賀に、声をはげましていった。

「との、それがしどもは、お虎を拝見仕るばかりにても、眼の法楽にござりますれば。なにとぞ……」

頭人は、伊賀を助けて遠慮をあらわした。虎が檻を烈しく揺っている。

「伊賀！」

重直は、いらだった声で叱った。

石井伊賀は、あきらめたように、かすれた声で、「曳^ひけ、曳^ひくがよい」と、庭の小者に伝えた。

「石井どの、卒^そ爾ながら、虎にはいかような餌をあたえられるのでござりますかな……」

御馬買衆頭人は、餌を曳^ひけというもののものしい声に、不安をおぼえたようである。

「さよう……、虎には死肉は無用でござりましてな。平素は、ほとんどが犬にて、時には鹿などを供しまする」

頭人が頷くところを、重直が横から声をはさんだ。

「まだある。馬じゃ、生き馬じゃ」

御馬買衆は、嫌な表情をした。

「正直にとられるな。うえさまのご酔狂にござる。馬こそは南部の宝にて……」

伊賀は小声であやまりながら、異常な亢奮が、重直の重い口をうごかしているのだと、にがい顔になった。

「鼓を打て、打ちつつけよ」

重直の声で、玄衛は鼓をとり、紐をしらべて、打ちはじめた。気乗りはしないのだが、気分と

は、別に、いい音が生まれた。

大書院の目は、築山の闇から虎檻に近づく二三の人影にあつめられている。

「なんと、女ではないか……」

一人の年若い女が縄をかけられ、白い横顔をみせた。二匹の虎は、せわしく檻のなかをうごきまわり、咆哮しあつた。

「ご禁令の邪宗門の女にござる」

石井伊賀は、御馬買衆に女の素姓を洩つたような声で告げた。

南部領内では、この春より切支丹宗徒の吟味を強化している。盛岡城下、花巻、遠野において、百七十余人が検束され、すでに九十人が処刑されていた。

御馬買衆も、さすがに緊張した顔をみかわした。酔いがさめている。いまから眼前で、邪宗徒とはいえ、一人の女が生き餌として、虎の檻に投ぜられるのだ。

玄衛は、恐怖をのがれるように、鼓を打っている。手をとめれば叫ぶかもしれない。月の光があざやかなだけに、夜景を黒白に隈どつて、おどろの世界にさそっている。

これは、現実のことではない。そうだ、根ノ国の出来事ではないか。根ノ国とは、海山遠く、地底ふかく沈黙する死者の国をさすという。

栗山大膳と無方規伯が、酒をくみかわしながら、おたがい根ノ国の住人に落着きましたな、と囁^{ささや}っていたことから、玄衛はおしえられたのであつた。

虎檻の前では、女の縛が解かれた。小者たちが、女の着衣を剝ぎにかかっている。

御馬買衆は、蒼白になりざわめいた。

玄衛は、ふと、重直とそれに連なる南部家の家臣たちに眼をはしらせた。彼らは、黙然と、う

ずくまっているようにみえた。領主のもとに、肅然と従っているのが無気味だった。

女は、逆らわずに、全裸を月光にさらした。

「との、もはや、恐惶仕りました」

御馬買衆頭人が、堪えられぬように重直に手をついた。

「いかさま、厳しきご統治にござります」

頭人は、重直が御馬買衆を公儀隠密とみたてて、示威のための残忍な見世物を催したとうけつつのだ。

玄衛は、ほっと安心して打つ手をとめた。

「えい！ 鼓じゃ、早打ちじゃ」

重直は、庭に眼をむけたままで、頭人の命乞いをしりぞけるように、烈しくいった。

玄衛は、仕方なく鼓に手をあてた。乱打することで、重直に抗議をしたかった。が、それはむしろ処刑の残酷を亢^{たか}める伴奏になっている。

小者たちが、虎を檻の奥に追いこみ、扉の施錠を引きぬいた。雌雄は怒号した。

邪宗門の女は、怖れるふうもなく、胸に十字架^{くわすた}をきるしぐさで檻に近づいた。

玄衛には、それが蒼い亡霊がうごいているようにみえ、しだいに眼の前が昏くなつた。鼓が肩から滑り落ちた。

「ああ、筑前に去^いにたい。もどりたい！」

玄衛は喪神していきながら、叫んだようであった。

「玄！ おまえは、虎をみたそうだが、それは、まことか……」

亢奮しているが、まだるっこい口調で、栗山吉次郎はいった。玄衛は、こっくりと頷いた。この主従は同年だった。十四歳である。

「おまえは、切支丹の女が、その虎に喰われるところを、鼓をたたいて欣うだけな……」

吉次郎は、虐めるようにいった。

「吉次郎さま、やめてくだされませ。わたくしは、気分が悪くなって、なにもおぼえてはおりませぬ」

玄衛は、口をとがらせてつよく首をふった。

「なんだ、その眼つきは……。玄！ おまえは吉次郎の家来だぞ」

吉次郎は、癩癩な声をあげ、やにわに、座ってかしこまっている玄衛の肩に足をかけて、蹴った。それを玄衛が軽く避けると、吉次郎はぶざまによろめいた。玄衛のうごきは舞いのようであった。

「玄め！ おまえは、この吉次郎に恥をかかせたのだぞ。武士が人前で氣を失うなど……。それでも、黒田の武士といえるか……」

吉次郎は、つづけざまに玄衛を蹴るのだが、そのたびに体をかわされ、泣き声になってわめいた。

「二人とも、およしなされ。わきまえもなく、騒がしいではありませぬか」

廊下を通りすがりに、吉次郎の姉の桂子かづこが、きびしくたしなめた。

「玄衛が、重直公の宴席で、氣絶したというのです。しかも、將軍家の御馬買のかたがたの前です。恥さらしです」

吉次郎は、口をとがらせ、姉にあまえるような声だが、玄衛は、それに嫉妬がふくまれているをおぼえた。

栗山大膳の関係者で、玄衛ぐらい、盛岡城にふかく、再三にわたって登っている者はいなかった。

盛岡御町奉行の《栗山氏人数改メ》に、貴船玄衛は、最下位に記され、「この者鼓打ち」と六字ほどつけたしされたばかりに、城主の南部重直にきこえ、その後は栗山氏を通ずるかたちで、よび出されるようになったのである。

栗山吉次郎にすれば、自分の家来にしている玄衛が、他の手にわたったようでも不快な思いがするであろう。

「そういえば、玄衛にただいま、お城からおむかえがみえたようじゃ」

桂子は、吉次郎の怒りでつりあがった眼を無視するようにして、うながした。

「嫌いやです。わたくしは、まいりませぬ」

玄衛は、思わず大声でいいながら、吉次郎の助けをもとめるように顔をみた。吉次郎は、わざとらしく眼をそらせた。

「嫌とはいえませぬ」

淡い香の匂いがして、桂子の大柄な軀が玄衛の前にふさがり、子供をあやすふうに、顔を近づ